慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ダニエル・ゲラン「フランス革命史研究に關するノート」
Sub Title	On Daniel Guerin's "French revolution"
Author	鈴木, 泰平(Suzuki, Taihei)
Publisher	三田史学会
Publication year	1952
Jtitle	史学 Vol.26, No.1/2 (1952. 12) ,p.101- 117
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19521200-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ダニエル・ゲラン「フランス革命史研究に關するノート」

鈴木泰平

まえがき

一九四六年に至つて、フランス革命史學界は、注目すべき一つの革命史を迎えることゝなつた。ダニエル・ゲランの「第一共和政下の階級の闘爭」と題する著作がそれである。ダニエル・ゲランは一九三九年に「獨占資本とファッシズム」を上梓した以外殆んど從來專門的な史書をものとしていない云わば在野の學者であるが、此の度の新著は從來の革命史の記述の形式を打ち破つた點に於いて多大の反響をよび專門史家の激しい批判をよび起すに至つたのである。全二卷からなる此の革命史は、徹底したマルキシズムに則つたものとして恐らく最大の著述であり、又、周致な史料操作を經てゐる點に於いて充分、史書としての評價を受けるものである。著者の意圖は後述するノートに見られる如く、近代プロレタリアートの史的系譜と階級闘爭の痕跡をフランス革命に求めようとするもので、從來、不當に閑却されていた革命民衆階級のフランス革命に於ける役割を改めて評價しようとする所にあり、そのためにオーラール以來の、ジャコバンによる妥協的な國防革命政治(恐嚇政治)の定説を打破し、出來得る限り、革命のブルジュア的性格と半プロレタリアート革命の性格を刻印しようとする所にある。全卷を通じて著者は繰返してロベスピエールの反動的政策を批難し、民衆の革命的意慾と行動が大革命の達成に偉大な貢獻をしたとしているが、斯樣な一つの目的的な歴史記述が、免れることの出來ない缺陷を他面に於いても濃厚に滲み出しているのも事實である。既にルフェーヴル教授は「革命史年報」(Annales Historique de la Révolution Française, No. 106. Avril-Juin 1947. (p. 173～179) に於いて刻明にその缺陷を指適し、ゲランの使用している革命派、コンミューヌ、ポピュレール等の概念が極めて模然としていること、革命に於けるサン・キュロットの中にはプチ・ブルジョアとも云ふべき小土地保有農民、折半小作人が入れられること、又その背後に於けるシンパサイザーの所在を無視してはならず、彼等の革命的要求は社會構造の變革ではなく、パンのみの獲得にあつたこと、等であつたとしている。教授が特に問題にしているのは、ゲランが階級闘爭を描くのに急な余り當時の社會的複雜性を極めて單純化し、山獄派がブルジョアジーの利益擁護のために最大の關心を拂つたとしていることである。教授は此れをもつて歴史的ペルスペクティヴを誤つた最大の

ものとして居り、その當らざる所以を革命ブルジョアジーの自己犧牲的な革命的行動の中に求めているのである。續いて教授はプロレタリアートが革命の指導權を握つてもブルジョアジーと同樣、ロベスピエール派革命政府の恐嚇政治の體制をとらざるを得ないであらうと述べ、革命の理想と方向が獨立生產者を基幹とする所の社會民主主義社會の建設にあつたとして、民衆の革命に對する階級的鬪爭と階級意識それ自體の存在を否定している。續いて教授はゲランがサン・ジェストの「共和制斷考」を無視した點に遺憾の意を表し、最後にゲランがテキストと史實を屢々無視し、且史料操作の點に於いても時間的要素を無視した取扱をしていることを述べて終つているのである。歷史記述が背後に於いて深い思想的、世界觀的裏付を持つてゐるのは當然のことであり、それを缺いては歷史記述が成立しないのは云ふまでもないが、ゲランの場合に於いては此の限りに於いては問題はない。しかし、ルフェーヴルに指摘された如き缺點を持つものが史書として果してどの程度位置づけられるものであるか、相當問題にされなければならないであろう。後述する「フランス革命史研究に關するノート」は此のゲランの著者の附錄として採錄されているものであるが、ルフェーヴルの以上の批判に照らした場合、多くの異論が出てくるものである。しかし、ルフェーヴルの批判とゲランの革命史家への批判を乘り超えて、そこには何者か暗示しているものが

あるやうに思ふのである。それは、歷史家とは如何なるものであり、如何なる在り方をすべきであるか、又歷史學とは如何なる學問的、現實的要請を持つべきであるかと云ふ點に於いてである。此のことは云い換えれば、理想的な歷史家とは如何なる在り方をすべきであり、歷史學の理想的な構成は如何にしてなさるべきかと云ふことである。問題は歷史記述が客觀的になし得るかどうかと云ふ一點にあると思はれるが、同時に此れに關聯して歷史家の在り方が、述べられているのである。ゲランの此の「ノート」を通じて、古くして新しい客觀的な歷史記述の可能性を考えて見たかつたのは、彼が立場の相異を超えて「現實存在としての歷史家」の在り方を鼓吹しているやうに思はれたからである。版權と紙面の都合で全體を紹介出來ないのは殘念であるが、部分的な抄譯を通じてゲランの方法と思想を再檢討して見たいと思ふ。

(Daniel Guerin. La lutte de classes sous la Première République, Bourgeois et "bras nus" (1793～1797). Tome II, Postface. p. 366～416)

一

私の見る限り、フランス革命史に關する完全な滿足すべきものは、從來、なかつたのである。しかし、史的對象の如何に拘らず、完全な著述は希ましいものであり、フランス革命に就いても同樣

のことが云えるのである。

ガブリエル・モノーは、歴史家は先學の方法と自分の方法を絶えず比較し檢討しなければならないと述べているが、このことはフランス革命の場合の如く、多くの異つた結論と解釋がある場合には、特に想起されなければならないことであろう。フランス革命の場合に限らず、凡そ同じ材料から全く違つた議論と解釋が導かれている際には、歴史家の視角の相異は絶えず檢討される必要があると思はれる。

扨て、吾々は大別すると、二種の革命史家の存在を認めることが出來る。その一つは、反革命的僧侶的史家と云はれるものであり、彼等にとつては、革命は憎惡の的であつた。カウッキーも指摘している如く、革命を爆發させた社會的反目は、今尚明らかにされていないのであるが、此れ等の反革命的、僧侶的史家は、現實の社會闘爭に於いてとつた反革命の陣營に據つて、その爆發の歴史的、社會的性格を描いたのである。換言すれば、彼等はフランスに於ける上層ブルジョアジーと同樣、プロレタリアート革命の課題をブルジョア革命の課題に轉置してフランス革命の説明をしたものである。彼等にとつて恐るべきものは、ブルジョアジーに對峙するサン・キュロットの動きであり、サン・キュロットを絶えず恐怖の念を以つて見つめていたのであつた。從つて彼等は「八十九年」の革命を完成した後、革命の社會的展開を企てた者を認めず、彼等を以つて社會的なアナルシーに道をつけたものとしていたのである。此の、彼等の歴史記述にとつた態度と革命のブルジョアジーの動きは四八年のドイツ・ブルジョアジー及び二十世紀のロシア・ブルジョアジーに酷似しているものであり、彼等は一樣に、プロレタリア革命の恐怖に脅えていたのである。

斯樣な立場に立つた者は、最近見られた如く、屢々、ファッシズムの陣營に訴えているのであるが、他方、カトリック教會によつても強力に支持されている場合が多いのである。教會は、現在それ自身の要求のために、自由主義、社會主義のマスクをつけているが、教會は元々、フランス革命を歴史のコースで最大の打擊を與えたものとして容赦しなかつたのである。それ故、同樣に革命を憎み、プロレタリアートの恐怖にとりつかれていた彼等は容易に妥協し、反革命的、カトリック的見地に於いて革命の敍述を企てようとしたのである。二十世紀の現代に於いて、生きようとする吾々にとつて、此のカテゴリーに屬する人々に此れ以上、關はり合ふ必要は毫もないであろう。吾々にとつて、より問題であり より檢討に値するものは第二のカテゴリーに屬する人々、云ひ換えれば、自由主義的歴史家である。

全般的に云ふならば、此れ等の歴史家は、反革命的史家と云はれる人々よりもより絞滑であつたと云へよう。それは彼等が巧みに自己の階級支配の正當證明を引き出したからである。彼等はブ

ルジョアジーが全ての人間の解放を企てたものとし、人間解放の合言葉としてデモクラシーなる用語を用ひたのであつた。此の企てを正當化し、階級支配の正當性を證明する場合に彼等が用ひた手段は、アンシアン・レジームに對する鬪爭に於いてブルジョアジーと民衆が共同動作に訴えたことを强調することであり、又同時に、此の時期から現はれるブルジョアジーと勞働者との間の分裂の萠芽にヴェールをかけることであつた。換言すれば、一七九三年の動亂期に於いて、弱々しいものではあるが、聞かうと思えば聞き取り得る新しい階級の、新しい聲を聞いて聞かぬ振りをすることであつたのである。

此れ等の自由主義歷史家の中の、最近の最も進步的な人は、此の一七九三年の階級鬪爭に於いて稍、正確な歷史的イマージュを描いているが、しかし、これとても、完全なものとは云へず、その上無味乾燥なものであり、その誇稱する科學的方法も結局に於いて、ブルジョア・デモクラシーの枠から脫していないものなのである。此處に於いて吾々は、革命の歷史家として第三のカテゴリーにある人を問題にしなければならないのであるが、殘念乍ら彼等はまとまつた仕事を未だ果し得ていないのである。十九世紀ドイツの科學的社會主義及び二十世紀初頭のロシア・ボルシェヴィズムに通曉している人々は革命に捧ぐべき勞作を持つていないのである。[1] 吾々が擧げ得るのはせいぜいカウツキーの小册子に過ぎない。[2]

以上を通觀して云えることは、結局吾々の問題とし、革命史研究の視角の相異點を探るには、革命のブルジョア・デモクラシーの解釋とマルキスト的解釋の間に止まつている多少は社會主義を標傍している進步的デモクラートを檢討する他には方法がないと云ふことである。

二

ジャン・ジョレース・ジョレースに入る前に一言ルイ・ブラン[3]に觸れて置きたい。ルイ・ブランの社會主義的な革命の解釋は優れたものである。しかし、そのジャコビニズムの階級的性格は明白にされて居らず、又、ロベスピエールに捧げた讚辭は獨斷的であり、全般にブルジョア・デモクラシーの軌道から余りはずれていないものと云はなければならない。

ジョレースの社會主義的革命史[4]は、民衆に對する同情と寬容の念をもつて緣られた賞讃すべきモニュメントであり、彼は課題の解明に際して恐るべき努力をしたのである。彼は先達ルイ・ブランと同樣、革命の事件の敍述に止まらず、進んで社會、經濟的條件の分析及び階級關係の分析に觸れて居り、就中彼は他では見られない民衆運動の素描に成功したのであつた。處で、本書は社會主義者の名に値するものゝ著述であらうか。余の考へによれ

ば、此れは社會民主主義者の書いたものであり、社會主義的な歴史記述には遠いものである。ルイ・ブランと同様、ジョレースは、彼をブルジョア・デモクラシーに結びつけている臍の緒を絶ち切つていないのである。彼は一部的にしか唯物史觀の方法を消化していないし、マルクス的唯物論とミッシュレーのミスティクな方法を混融しようとしたのであつた。しかし、斯様な結合は結局不純な成果しか生み出さないのが常である。此の例として、ジョレースに於けるジロンドとジャコバンの闘爭に對する解釋をとりあげて見よう。

ジョレースが此の場合、對象の正しい把握をするためには、當然、マルクスの「ブリューメール十八日」の方法を適用しなければならない譯であるが、此の方法による限りは、彼は兩者に於ける階級闘爭の深刻な痕跡を指摘出來る筈である。しかし、彼はジロンド、ジャコバン兩派の爭いは一般的な普遍的に見られる人間の權力爭いに過ぎないと云つているのである。吾々は此の説明には滿足出來ないし、又マルキシズムをもつて事態を眺め得ないものが如何に誤つた解釋に陷るかを知つたのである。ジョレースの著作に關して、次に指摘すべき主要な缺陷は、革命の解釋に於けるマルキスト的概念と社民主主義的概念の混在と動搖である。換言すれば彼の歴史解釋には一定の立場が確立していないことである。此のことは、彼の、第三階級内部に於ける階層的分化及びロベスピェール派とエベール派の闘爭に對する解釋に於いて極めて明白に示されていると云えよう。ジョレースは第三階級の階層的分化を人間的意志の所産乃至は黨派的な策動の結果として見ているが、此れは明らかに社會それ自身の發展の結果によるものであり、又ロベスピェール・エベール兩派の爭いはその背後に於ける階級闘爭によるものでなければならない。斯様な誤謬を犯すことによつてジョレースはジャック・ルーの立場を誤解し、その眞實な革命的指導者としての評價をし得なかつたのである。

同様に、彼の社會民主主義的思想はバブーフの役割を正しく評價するのを邪げているのである。ジョレースは如何にしてブルジョア革命の晩秋にバブーヴィズムが咲いたかを示し、又その共産主義が革命的危機の崇高な震動であると信じていたが、マルクスはより明白に、平等のコンミュニズムをブルジョア革命の論理的結果として考えていたのであつた。(5) ジョレースは又、國民公會の擁護者として自己を現はしたい慾望にかられた際、明らかにマルキシズムに忠實ではなかつたのである。本書に於いて吾々は、ジョレースが常に二箇の相矛盾した史的解釋——フランス革命の社會主義的解釋とブルジョア的解釋——を融合しようと努力していたと考へざるを得ない。しかし、彼は此の矛盾した方法から最早脱却するのが不可能であると知つた際に、史的方法としての最も單純な推理の方法に趨つたのであつた。此の結果、彼は、ジャッ

ク・ルー、國民公會、集産主義を同時に敢えて擁護するに至つたのである。

ジョレースの著書に窺はれる矛盾は、何れにせよ彼の固有の政治的地位の矛盾の反映に過ぎないものであり、彼は社會主義の思想的寶庫から借り出した主張を述べることによつて、革命ブルジョアジーとサンキュロットの前衛分子とを結びつける陳腐な方法の行使に成功したのであつた。ジョレースの著書に於ける基本的考へがブルジョア・デモクラシーの軌道の中に社會主義的運動を維治することにあるのは、今や明らかであると云はなければならない。(6)彼は又、遠い未來に於ける社會主義の降臨を告げているのであるが、此の黄金時代を期待する點に於いて彼はプロレタリアートとブルジョアジーの自由主義分子の共同を企てたのであつた。吾々は、此れに對して、結局、マルキスト的分析の方法のみがブルジョア・デモクラシーの軌道から近代プロレタリアートを解放するものであることを强調したいのである。

ジョレースを語るに當り、クロポトキン(7)に一言觸れて置くことゝしよう。彼の大革命史は稍まとまりを缺いているものではあるが、獨創的なものも反面持つているのである。彼の、サン・キュロットと山嶽派ブルジョアジーの間に於ける階級關係の評價は正しいものであり、その方法は正確なものと云へよう。しかし、全般的に見て、尙、彼はブルジョア・デモクラシーを構想するモードから解き放なされているとは云ひ難たいのである。

アルベール・マティエ・全生涯を歴史研究に捧げる職業的史家は數少いものであるが、マティエはその稀な一人としてジョレースに引き續き進歩的なブルジョア・デモクラシーのテーゼを、最も科學的に定立された史的事實の認識の上に與えたものであつた。マティエの勞作は權威あるものであり、十數年此の方その名聲は衰えて居らず、今尙、彼は一部の者によつてタブー視されているのである。フランス革命の門をたゝく者は、通例、アルマン・コランの三卷の普及版(8)を讀み始めるのを常とするが、これは確かに出發點であり、又吾々の出發點にもなつているのである。彼は、多大の努力をもつて、その著書の中に、所謂史的唯物論の方法の幾つかを紹介し、同時に彼が理解し得たものを或ひは寧ろその方法が支配階級にとつて余り危險ではないものを一般化したのであつた。

彼の著書を通じて極めて注目すべきことは、經濟的要素に始めて歴史科學の中に於ける居住權を與えたことであり、大革命の歴史は此れによつて刷新されることになつたのである。(9)しかし、歴史に於いて、經濟的側面のみしか見ていないと云ふことは、史的唯物論の概念を一つの單純な戯畫にすることであり、エンゲルスは既に、此の、マルクス主義のデフォルマシオンに激しく反對していたのである。史的唯物論に從えば、歴史の決定的要素は最後

には、現實に於ける生の生産と再生産なのであり、マルクスも此れ以上のことは云つていないのである。經濟的要素を捕えて歴史の唯一の決定要因であると云ふものがあれば、その人は此の命題を空疎な抽象的なフラーズに變えているに過ぎないものであらう。[10]又、史的唯物論の方法は單に物價及び景氣變動の曲線を追い求めることにある譯ではない。[11]それは本質的には、階級間の關係及び階級鬪爭の分析に關はるものなのである。

エンゲルスは經濟的生産及びそれに必然的に基づく社會組織が各時代の精神的、政治的歴史の基礎を構成するものであり、從つて全ての歴史は搾取階級と被搾取階級との歴史であると考えていたのであるが、マティエは階級鬪爭が歴史の根底を構成することを明白に認めていないのである。彼は寧ろ過去の中に階級鬪爭を探求するマルクス派歴史家の方法に訓戒を與えて居り、階級史觀には反對の態度をとつていたのであつた。

マティエの、革命初期の段階――王權の崩壞とジロンド、モンタニャール間の鬪爭――に關する記述は第一級のものであり、事件の深刻なる動きとその政治的、經濟的メカニズムは詳細に描かれていると云へよう。吾々は最初に此の古典的記述にひたらなければ、一七九三年五月三十一日から一七九四年七月二十七日に至る革命の最大の危機[12]に近づき且理解することは不可能なのである。[13]マティエは更に此れ以上の寄與を物價騰貴と生活資料の問題になし遂げたのであるが、しかし彼は殘念ながら其處でとまつて仕舞つたのであつた。彼のユマニテに對する讃仰の念にもかゝわらず、彼はマルクス的方法を放擲し、進歩的急進主義者としてその師オーラールから稍進んだものにとゞまつたのである。第三共和國の官吏であり、ブルジョア・デモクラシーの忠實なる奉仕者であるマティエはオーラールと同樣、それが全てであつた。彼の現在に於けるブルジョアジーとプロレタリアートとの間の確執を緩和しようとする熱情は、彼を驅つてフランス革命に於けるそのヴィジョンを起させたのであるが、此の結果、彼は一七九三年から九四年に於いてジョコバンの演じた階級間の爭いの調停者的役割に熱烈に歸依して仕舞つたのである。此の時以來、彼は脫線を始め、此の時代の階級鬪爭の崩芽がブルジョアとブラ・ヌウとの間に存していることを見ないし、又見ようともしなかつたのであつた。マティエは又、ロベスピエールに途方もない高い位置を與へているが此れこそ大革命の最大の危機を理解し得ない重大な原因になつているのである。[13]同樣に彼は又、反クリスト教の恐るべき企圖を外人の陰謀に歸し、ジャコバンに於ける黨派爭を「德」の「惡」に對する勝利として、又テルミドールの革命を、反對に「惡」の「德」に對する復讐として現す失敗を犯したのである。[14]

吾々は、普通の人が革命史の第三卷を讀む場合、病氣、退屈、不滿の感じを表はさないではゐられないと考へるものであり、又

マティエの構想の中に或る不揃なもの、俗語で云ふ結婚してゐないものが同棲してゐることを感じさせずには置かないものがあると思ふのである。此の講義は、吾々が最初其れを讀んだ當時の回想を思ひ起すならば、此れが大革命を決定的に嫌いにさせない限り、以然として人々を空腹に止まらしてゐるのである。

マティエがオーラールから稍々離れてゐたと同じく、マティエの弟子にして後繼者であるジョルジュ・ルフェーヴル氏[15]も其の師から稍々離れてゐるのである。然し彼と云へども尙且ブルジョア・デモクラシーの塔から解き放されてゐないのである。彼がマティエから離れ、且官學の道を外れてゐる所のポイントを判定したのは非常な愼重さと厚いヴェールとを被せられた形式に於いてであつた。吾々は彼の努力に敬意を表すべきであると共に彼の憶病さを遺憾としなければならないのである。疑もなくルフェーヴル氏は積極的な學生にラインの間にあるものを讀み取る配慮を與へたが、然し全ての聽講者は積極的ではないのである。ソルボンヌの大多數の聽講者は其の年齡としては自然ではあるが、受身の傾向にあるのであり、彼等は字面以外には其の師の思想を留め得ないのである。彼等は其れを乘り超えることが出來ないのだ。彼等は、差し出された所の、多少は判別出來る棲木をいつも見分けがつかないし、「愼重のヴェール」を剝がれた明白な生氣ある結論に變形され得る暗示をも感得出來ないのである。[16] 吾々は此の師が若しも其の環境と制約から全く自由にされてゐれば、革命史に寄與し得るであらうと云ふ前に、其れを乘り超えて凡ての人を感激させる尊敬、人格及び所業を考へることが出來るのである。

三

通例、歷史家は其の不偏、不黨の標準に依つて判斷すべきであると考えられてゐるが、吾々は讀者以上に此の點に期待してゐるのである。ブルジョア・デモクラシーの歷史家に對して列擧した不滿を思ひ出して、吾々は次のやうに抗議するのである。即ち貴方がたは彼等が不偏・不黨ではないと非難するが、然し貴方がたはさうであらうか、と。此處に於いて、吾々は重大な問題に逢着するのである。即ち歷史に於ける不偏、不賞、公平無私の問題が其れである。歷史家は其の同情、個人的反感、政治的熱情、階級の利害をなくすことが出來るのであらうか。此處で吾々は讀者の新しい反對に遭遇するのである。何故貴方は一つの同じ事物に關係する場合、歷史家の個人的好み及び其の階級の利害に關するものを同じ位置に積み重ねようとするのであらうか。と。此れに對して吾々は人間が書いたものは全て彼が屬する階級の印判を多少は擔つてゐることを認めようではないか。と申し上げたい。オーラールがダントンをその偶像とし、[17] ジョレースが自分で國民公會内でつきたいと思つた位置をロベスピエールの側に與へ、マティ

エが同じくロベスピエールに心からの尊敬を捧げた時、彼等の好みと偏見は單なる趣味趣向の問題ではなかつたのである。此れ等の歴史家を藝術のマアチュアー一人はルーベンスに一人はレンブラントに熱中するやうな——と混同してはならないものであり、彼等の好みは政治的位置に且又、階級の態度に相應するものなのである。溫和な急進社會主義者オーラールはダントンに於いて疑はしい、好戰的な煽動的な政治家の原型を好んだのであるが、彼は内實は其の黨派間で榮えてゐる保守派であり、稍々進歩的なデモクラートであるジオレースとマテイエはロベスピエールに於けるブルジョアとブラ・タウとの間の柔軟な調停者を好んだのである。此れ等の好みは、とりも直さず、當時の支配階級の利益の表現に過ぎないのである。所與の時期に於ける諸階級間の反對的な利益の間には一般的利益なるものは有り得ない所であり、其處には單に或る力の關係があるだけである。同樣に歴史には公平・無私と云ふことはないし、又有り得ないのである。歴史は幾何學的圖形乃至は視覺的現象に關り合ふものではなくて、階級鬪爭を明白にし、人間の政治的情熱を復活せしめるものなのである。他方・幾何學者、物理學者は客觀的であるべきであると云ふ人からは思想は生れないのである。歴史家は其れ自體、如何に抗辨しようとも一つの階級に歸屬するものであり、彼は如何に辨解しようとも其の階級の情熱と結婚してゐるのである。[18] 彼が喚び覺ました過去の事件と彼の階級が惹き起した鬪爭の間には一聯のつながりがあるのである。彼は黨派に組みしないやうにすることは出來ない。彼が其の屬する階級の利益、個人的好みに超然としようと目論んでも其れは自分自身を、又讀者を欺くことなのである。

フランス革命は明らかに、無關心を以つては少しでも話すことの出來ない事件の一つであり、現在でもフランス革命は其れに關する論爭を嚴しく持ち續けてゐるのである。レイモン・アロンも書いてゐる如く、[19] 理論的にテルミドール九日或はブリューメール十八日に完成した大革命は未だ其の最も眞正な目的を見出してゐないのである。革命に關する限り、歴史的な不偏、不黨性は未だ黨派の視覺を乘り超えてゐないのである。此の點から見るならば、ミシュレー、ラマルティーヌ、テーヌは公平無私な歴史家とは考へられない。然し時代の推移と科學の一般的進歩と共にフランス革命の歴史は、其れ自體進歩したのである。處で、吾々にはフュステル・ド・クーランジュに嚴密な客觀的歴史の最初のモデルを歸すべきではないであらうか。彼のフランクの王朝の序文[20]を讀むことゝしよう。其れに於いて彼は非常な努力をもつて歴史に對して純粹科學の屬性を要求してゐるのである

四

記述した如く、歴史には他の歸納科學に於けると同じく混同し得ない全く別箇な二つの部分があるのである。しかし、不幸にもクーランジュは分析と綜合即ち史的事實の認識と歴史家に依る事實の解釋を混同したのであつた。歴史家は、何より先に、彼が記述を企圖してゐる事實を、細心の注意を以つて檢證し、再現し、且クーランジュが注意してゐる如く、テキストを最も微細な點にまで直接的に研究し、其してテキストが證明してゐることのみを信じなければならないのである。歴史家は、如何なる偏見にもとらはれずに事實に近づくべきであり、テキストを讀んだ後でなければ、主張をなすべきではなく、且其の信念に止まる前に彼が見つめてゐた對象に固有なイデーを考へてはならないのである。歴史的事實の認識が比較的に新しい科學であるとすることは正しい（フランクの王朝は一八八八年に出版されてゐる）。クーランジュの貫いた道をたどつてソルボンヌ及びエコール・ド・シャルトルの教授は、史料の組織的檢證及び適當な手段に依つて事實の權威性を確かめる方法を決定的に修正して仕舞つたのであつた。しかし、歴史事實の認識は歴史のA、B、Cに過ぎず、歴史はテキストの批判のみではない。又それのみでは有り得ないし、又個々の事實の聯結のみでもないのである。他の未だ解釋されてゐない事實と何等連絡のない史的事實は胴體から切り離された手足又は耳のやうなものであり、其れは他の付屬部門との結合に依つてのみ生命を得るものなのである。ガブリエル・モノーも書いてゐる如く、史的批判の仕事はドキュマンの集積に過ぎないし、それだけでは原因結果の連鎖に於ける價値或は比較的位置を定め得ないものである。――換言すれば、歴史は、事實が依存の相互的關聯に於いて再結合され、排列され、呈示された時に於いてのみ眞に存在するものと云はなければならない。――つまり歴史は單に事實を確定することに成立するのではなく、事實を分析し、比較し連關を指適することに成立してゐるのである。歴史科學に於ける此の二つの操作の中、綜合は最も重大であり、優れた歴史家はテキストに回執しないで、最大の正確性を以つて、其れを解釋するものなのである。處で、此の事實の解釋は、事實の認識と同樣、嚴格な科學的方法に依據し得ないのである。其れは本質的には主觀的なものであり、歴史家は事實の間から撰擇すべきものなのである。レイモン・アロンも指摘する如く[21]歴史家は史料の批判及び事實の確定に於いて客觀性に向ふとすると共に他方、間隙を埋め、熟知の事實に弱い橋をかけ、假定を設定しなければならない。クーランジュが主張してゐる如く、歴史家はドキュマンから其れが含んでゐる全てを引出のに滿足してはならず、又、其れが含んでゐないことをつけ加へるのをためらつてはならないのである。又、歴史家は單なる學者ではなく、或る程度まで彼は又藝術家であり創作家でなければならない。ガブリエル・モノーも云つてゐる[22]如く、

歴史家が史的事實を構成していてゐる材料を單に區分し、結合するに止まるならば、其の仕事の半分しか成し得ないことゝなるう。此の事實を理解するためには、歴史家は、其れに生命を賦與しなければならない。人間を再生するためには科學に、全ての藝術作品に見られるが如き個人的要素を結合しなければならない。……斯くして歴史的コンポジシオンの中に滲透する個人的、主觀的要素は明らかに客觀的現實を凌駕してゐる或るものをつけ加へるのである。更に黨派に組することなくして人間を再現させようとするのは不可能である。ルイ・ブールドオは正しくも、其れは生命のスペクタクルに平然として立合ふやうにさせることでもなければ冷かに述べることではないと云つてゐるのである。と云うのは、ことが人間に關することであり、吾々が人間であるからである。彼は又更に、歴史家は熱烈に論戰に從ふ情熱的存在である。と云つているのである。[23]

吾々の歴史の教授は、其の先覺者より以上の猜疑心を以つて歴史的事實を檢證したが、其の前任者と同樣彼等は、其の事實の解釋を主觀的情熱及び階級の偏見の上に基づいてやつてゐるのである。吾々は同樣に、彼等が其の客觀性への意圖にもかゝわらず其の解釋に於いては恐らく十九世紀の二、三の歴史家よりもより一方的であつたと云へ得るのである。微細な事實を扱ふ場合、愼重を極めた態度をとり、又全般的に自由主義的ブルジョアの偏見と情熱を以つて歴史を書いた、偉大なミシュレーは、一見すれば、屢々ブルジョア階級の地平線の上に立つてゐるのである。しかし、近代學派の一方的な偏つた解釋は、此のミシュレーの才能の明晰さに比較すると進歩どころか歴史の後退を劃してゐるのである。此の章を終るに當り、フュステル・ド・クーランジュの所謂客觀性は根本に於いて、明確な政治的見解の一點に相應する態度の一つのマスクに過ぎないと云ふことを見ることゝしよう。

一九一四年の大戰中、ブルジョアジーが神聖なる結合の名目の下に其の階級の利益を擬らしたのと同樣、クーランジュはブルジョアジーの利益に於いて歴史家に一種の神聖なる結合を求めようとしたのであつた。一八七一年の敗北後、間もなく現はれた論文に於いて、[24] 彼は、吾々は相互に自發的に提携けしなければならない。吾々は內亂から外國との戰爭を勃發させた。祖國の勝利よりも自分の黨の勝利を選んだものが吾々の中にゐる。吾々は歴史に於いても同樣であつた。五十年此の方、吾々歴史家は、黨派の者であつた。彼等が如何に眞實であり、客觀的であつたと信じても彼等は吾々を分裂させた輿論の何れか一に屈したのである。」と書いてゐるが、彼は、要するに、歴史の純潔である此の完全な客觀性を要求したのである。此のことは、勿論甚だしく間違つてゐることではない。彼は自分の考への結論として「現在吾々は戰爭の時代に生きてゐるが、科學が從來通りの平靜さを保つことは殆んど

不可能である。吾々の周圍は全て鬪爭なのだ。研究其れ自體は、必然的に、楯と劍で武裝するのである。」と書いているのであるが、フュステルは斯くてオリンピヤの山から下り、戰鬪に於いては自分の階級の側についたのである。トロツキーは特に反動的歷史家に於ける所謂客觀性の欺慢性を非離し、マドランに鋭い攻擊を與えたことがあつた。歷史に於ける、客觀性の問題に、最も徹底した行き方を示しているのは、恐らくロシアの歷史家であらう。處で、歷史は如何なる場合にも客觀的にはなり得ないのであるが、しかし、歷史は其れが眞實から近づくに從つて客觀的（オブゼエクティヴ）になり得るのである。換言すれば、其れは實驗科學が自然法則に取りかゝる樣に、社會進展の諸法則を發見する度合に於いて一つの科學になり得るのである。吾々は歷史家の個人的撰擇を抽象した、云はば理想的な歷史家を考へたのである。客觀性は公平無私を意味するものではなく、普遍性を意味するのである。本質的なことは公平無私と客觀性との間の混同が解消されるかどうかと云ふことなのである。

五

革命の事件を通じて眞理を追求して行つた場合、ブルジョア史家が其の代辨者であつた所の階級が、或る本質的な點に於いて眞實を欺き、隱して利益を得てゐるのを見出すのである。其れは亦現代に於けるブルジョアと勞働階級の間に現存する階級の反目を

隱し輕減して利益を得てゐるのである。革命を通じて、支配階級は平等と博愛と云う眞情の流露の下にサン・キュロットに向けられた階級鬪爭を僞裝する配慮を拂い、又、ブルジョアとブラヌウとの間の階級鬪爭に、「危機に瀕した祖國と公安の曲目」を演奏して巧みにヴェールをかけたのであつた。云はば、大革命のブルジョア俳優が演じたものを革命史家が其れに倣つて演じた譯なのである。革命史家はつまり其の「革命研究」から直接デモクラシーならぬブルジョア・デモクラシーを、階級鬪爭ならぬ階級の協力を、內戰ならぬ國防を正當化するのに成功したのである。彼等の事實の解釋は此の根本的缺陷から解放されて居らず、彼等は隱すべき何物かを持つてゐるのである。吾々は以上の吾々の檢討を通じて、除外、隱蔽の、云はば現行犯を捕えた譯であつた。

ブルジョア史家が眞實を隱す場合、彼等は意識的にするのであらうか、其れとも無意識的にするのであらうか。自分の階級の利益を擁護するのに一杯な彼等は、史的眞實を追求する場合、重大な修正を考へてゐるのではあるまいか。其れとも反對に彼等は、吾々が知らない方が好いと思はれることを吾々に無視させるやうにする方法に精通してゐるのであらうか。此の問題は歷史の分野よりも寧ろ心理學の分野に屬してゐるやうに思はれる。

扨て、吾々にとつて重要なことは階級の動因である物質的基礎であり、就中其れに於ける結果である。歷史家が忠實であるか否

かと云ふことは、其れを惹きつけてゐる階級の利益に關することであり、又其れは壓迫階級と被壓迫階級との間の關係に觸れているかどうかと云ふことである。ことは此れだけのことに過ぎない。吾々は、歴史を書くのに、凡ゆる感情を排し、事實其れ自體の、檢證には極端に愼重なのである。クーランジュの設定した方法に從つて、吾々は如何なる先入見を持たずに其れに接近し、テキストの檢證以前には如何なる論もはかないのである。史的事實の認識と解釋には常に嚴重なる區別が心要であり、一度事實の正確性が判斷された場合にのみ他の歴史家と同樣の操作を行ふのである。云ふまでもなく、吾々は吾々自身のヴィジョンで其れを窺い、吾々自身、自らサン・キュロットの中に身を置いて其の階級的利益を考へるのである。吾々のグラスは、云ふまでもなく、他の歴史家のグラスよりも優れて居り、ブルジョア史家の其れよりも偏つてゐないのである。要するに支配階級が隱すべき利益を持つてゐるのに對して、吾々は隱すべき何ものを持つてゐないのである。計畫的に、或は偶然に破壞された史料に對して、吾々は、職業史家と異り、探求の方法を持ち合はせてゐないのである。此處に於いて吾々はロシヤの革命史家ヴィクトル・セルジュの言葉[25]に歸らざるを得ない。「歴史家の〝不偏不黨性〟なるものは一つの傳說に過ぎない、……歴史家は常に其の時代の、其の社會階級の、其の國土の、政治的認識の中にあるのである。然し現在、眞實の源泉と兩立し得る唯一の偏見はプロレタリアート歴史家の其れである。何故ならば、勞働階級は凡ゆる環境に於いて眞實の認識をかち得る唯一のものだからである。勞働階級は少くとも歴史の世界に於いて隱すべき何物も持つてゐないのである。」

六

吾々は此處に於いて不偏不黨性と客觀性の間に必要な區別をする必要に達した。プロレタリアートの歴史家は堂々と〝不偏不黨〟性をかなぐり捨てるのであるが、眞實の認識を得るためには、又史的プロセスの內在的法則を識別するためには、彼の方法が許す程度に於いて、客觀的たらんと心掛けるのである。此の方法は既に周知である所の、歴史の唯物的概念であり、其れ自身はフランス革命の經驗を超えた發見なのである。其れは、此の如何なる史的分析の方法がなし得る以上に其の中に於いて客觀性の保證を呈示してゐるのである。吾々プロレタリアート史家は、積極的に吾々の方法が、歴史を眞に客觀的たらしめる唯一のものであることを聲を高くして叫び得る權利を持つてゐると考へる。勞働階級が歴史的に追求してゐる目標は全ての階級間の反目の消滅であり、單に一つの階級のではなく人間全體の利益に應する權力の掌握である。

斯くてプロレタリアートが要求する歴史家の客觀性は、ブルジョア史家の場合と異り、史的進展の所與の段階に制限されず、人

類の始めから終りまでの全ての社會的進展に支へられてゐるのである。歴史の唯物的概念に依つて、指導されてゐるプロレタリアート史家のみが、各段階に於いて、相互に鬪爭してゐる階級を超えて、史的發展の各段階の客觀的必然性を認識する力を持つてゐるのである。換言すればマルキストのみが、史的プロセスの全聯關を認識し得るものである。

七

吾々は客觀性の問題に留ることなく、更により重要な問題に入らなくてはならない。既に見た如く、多くの革命史家がブルジョアジーとサン・キュロットの間の階級的共同を强調し、非常な愼重さをもつて、兩者の調和、融合に關する材料を集めてゐたのは事實である。此れに對して吾々は、革命前衞分子の運動を其の未成熟な姿に於いて現はし、且崩芽的形式に於いてではあるが階級鬪爭を呈示しようとした。或る人々は此の吾々の方法を科學的ではないと云ふかも知れない。然し、吾々は、例へ崩芽的であり、未成熟であつても、其れは特有の內在的利益を持つてゐると答へるであらう。中世イタリー・デモクラシーの研究家ジュリアン・ルシェール[26]、及びエンゲルスも此の崩芽的な形式に於けるプロレタリア革命の重要性を指適して居り、其の價値を認識しないことは歴史に於ける偉大な事實を正當に評價しないことゝ同じであると云つてゐるのである。

然し吾々は全てを知り盡さんとする職業的史家ではなく、現代に生きる人間なのである。歴史は純粹科學ではなく應用科學であり、現代をよりよく理解するために、過去を考察し、其の中から現代に應用し得る教訓を汲み取るものなのである。革命に吾々が關心を持つのは、一七九三年に於ける歴史の日程であつたアスペクトではなく、一七九三年に崩芽的なものであつたのが、現代の日程になつてゐるからである。吾々は決して意識的にブルジョア革命を無視し、第二の、崩芽的形式に於ける、プロレタリアート革命のみを强調しようとしてゐる譯ではない。寧ろ前者の充分な研究なくしては後者は理解し得ないものである。唯吾々は後者が從來不當に閑却されて來たが故に其れを强調するに止まるに過ぎない。フランス革命は、融合的革命ではあるが、窮局に於いては一つのブルジョア革命であり、半プロレタリアート的性格を濃くもつてゐるものである。

最後に指適したいことは、過去が現在を理解するのを助けるのと同樣、現在も又過去をよりよく理解するのを助けると云ふことである。勿論、現在のイマージュを以つて過去を再現し、過去の歴史の中に近代的思想を導入するのは誤りであり、此の意味に於ける限りに於いてはクーランジュは正しいのである。しかし、ロシヤ革命に於ける權力の分裂の經驗やドイツ、イスパニヤ、フランスの革命及び內亂は、一七九三年の崩芽的形式に於いて現は

れた、現象とメカニズムをよりよく理解せしめないであらうか。最近の革命的經驗を明白にすることは確かに先人の解釋を補ひ、訂正し得るものである。

吾々が提示しようとする革命の像は正しいものであらうか。此の像が、他の人の描いた像と異つてゐても、吾々は吾々の像と他のとをもう一度檢證し、其の上兩者が眞理により近く接近するのを求めるのである。歴史は緩慢ではあるが、確實に眞理を目ざすものである――人間性（ユマニテ）が確實に其の解放を求めて歩んでゐるのと同樣――。「歴史家が絶えず同じ主題を取り上げ、同じテキストを批判し、自明と思はれてゐる事實に疑をさしはさむのを見た場合、人々は歴史はペネロープの布であると思ひ勝ちである。……百年以來の史的批判の勞作を通じて成された、歴史科學の進歩は最も懷疑的な、最も先入見に滿ちた精神をも打たずにはゐないのである」とモノーは云つてゐるが、眞理は其の必然的な前進を阻む凡ゆる努力にも拘らず其の道を歩むものなのであり、又其れは勞働階級の立場と混融してゐるものなのである。

註（1）Zakher 及び m. Bouchemakine 等專門史家の名は「革命史研究年報」等に見えるが、その數はさう多いとは思はれない。又、ゲランの云ふ如く、大著の名に値するものも見當らない。

（2）Kautsky, La lutte de classes en France en 1789.

（3）Blanc (Louis), Histoire de la Révolution, 12 Tomes., 1842～62.

（4）Jaurès (Jean), Histoire Socialiste: 1. La Constituante; II, La Législative; III～IV. La Convention jusquau 9 Thermidor, 1901～04.

（5）Guérin, La lutte de classes……Tome II. p. 372～3. ババーフの研究史的系譜は存外短く、又、見るべき成果は少い。しかし、ルフェーヴルの第九回國際歴史學會に於ける報告（IXe Congrès International des Sciences Histriques. I. Rapports. p. 561～71）によつて、ババーブイズムが極めて明白になつた。ルフェーヴルの指摘した主要なポイントは、ババービスムは　一、分配に關するコンミュニズムであること　二、農業經濟に於ける分配のコンミュニズムであること　三、生産手段に關しては一貫した理論がなく、生産手段に於けるコンミュニズムを前提しないコンミュニズムであること等である。

（6）Guérin, Ib. p. 374.

（7）Kropotkine (Pierre), La grande Révolution 1789～1793, 1909.

(8) Mathiez, La Révolution française, 3 Tomes., 1922～27.

(9) Guérin, Ib., p. 376.

(10) Guérin, Ib., p. 376.

(11) 此れは、云ふまでもなく Labrousse (C.～E.) 教授の傑作 La crise de l'économie française à la fin de l'ancien régime et au début de la Révolution, I, 1944. を指して、皮肉つている言葉である。しかし、ゲランと雖も、ラブルース教授の、フランス革命の直接原因に關する尨大な實證的成果には、敬意を表せざるを得ないであらう。ルフェーヴル教授の言葉を借りるならば、此の「余のソルボンス在任九年間に於ける最大の傑作」の表現によつて、單純に革命と啓蒙思想を結びつける方法は、完全に過去のものとなつた。ダニエル・モルネのフランス革命の知的原因 (D. Mornet, Les Origines de la R. F. 1935) はかくて、その領域に於ける最後の古典的存在になつた。

(12) ジャコバン派革命政治が確立され、テルミドールの革命に至る所謂恐嚇政治の時期を指す。オーラールの唱えた事態說 (Thèse de Circonstances) によつて、恐嚇政治の成立及び存續が正當化されたが、マティエの考へも此れと同じである。

(13) Mathiez, La Vie chère et le mouvement social sous la Terreur, 1927. マティエの本書は、マルキストの立場よりすれば、ゲランの云ふ如く、極めて不徹底な分析である。ジャコバン派革命政府の經濟政策とその施行効果に關聯して民衆階級の生活資料を廻る問題の解決に成功しているが、階級鬪爭の分析は行はれて居らず、問題の背後に於ける見透は明確さを缺いている。その功蹟は、アンラージェ及びマラーの立場を明らかにし、ジャコバン社會政策の限界を指摘した點にある。

(13) マティエのロベスピエールに對する評價は、特に Autour de Robespierre, La Corruption Parlementaire sous la Terreur, p. 245～53. に於いて明瞭に窺ふことが出來る。マティエに對してオーラールはロベスピエールを極めて低く評價し、兩者の間に猛烈な論爭を惹起した。(Aulard, Histoire politique de la Révolution Française, p. 423.) ゲランは別箇の觀點から、ロベスピエールの社會保障政策の限界を認め、その革命兩階級に於けるプチ・ブルジョア的な調停的位置を非難しているのである。

(14) Dechristianisation は正しくは豐田助教授の如くクリスト教離脱運動とすべきであらう。ロベスピエールの宗教政策特に理性崇拜は純然たる宗教政策ではなくて、政治

的に求心的統一が求められている際に（豐田堯、フランス革命とキリスト教、史林三十三ノ一）とられた一種の革命政治であり、ゲランの云ふ如く、外人の陰謀に全てを歸しているのは當を得ている。より廣い視點から、ゲランは判斷すべきではなかつたであらうか。

（15）ルフェーヴルは、ゲランの此の診斷に異議を唱え、自分はマティエの弟子はなく、又彼には數回しか合つていないとし、自分の師と仰ぐのは、ジョレースだと云つている。（Annales Histriques de la Révolution Française, No. 106. Avril～Juin 1947. p. 188～90).

（16）此の點についても、ルフェーヴルは、余とゲラン氏とでは、歴史研究と歴史教授の仕事について同じ思想を抱いていないと述べ（前掲書一八九―一九〇頁）ゲランの言説の不當なることを述べている。

（17）オーラールのダントンに對する評價は、A. Aulard, Études et Leçons sur la Révolution Française. Tome II, p. 39～106. 及び Histoire politique de la Révolutian Française, p. 430. に於いて窺ふことが出來る。オーラールによれば、ダントンは革命政治家として又國防政治家として卓越した存在であつた。

（18）Guérin, Ib., p. 381.

（19）Aron (Raymond), Introduction à philosophie de l'histoire, 1938, 106～7.

（20）Fustel de Coulanges, Histoire des Institutions politiques de l'ancienne France, La monarchie franque, 1882, p. 32.

（21）Aron, Ib., p. 292.

（22）Monod (Gabriel), De la mèthode dans les sciences, 1909, p. 343. ((Histoire))

（23）Bourdeau (Louis), L'Histoire et les historiens, 1872, p. 243.

（24）Fustel de Coulanges, Questions contemporaines, 1916, p. 6～25. ((De da manière d'ecrire l'histoire en France et en Allemagne depuis cinquante ans)), Revue des Deux Monde, septembre 1872.

（25）Serge (Victor), L'an I de la Révolution Russe, 1930, avant-propos, I.

（26）Luchire (Julien), Les démocratie italiennes, 1925, p. 255.

（27）フランス革命が複合革命であることを最初に提示したのはルフェーヴルである。Lefebvre, Quatre-Vingt, Neuf. 1939, p. 233～46. (Conclusion), Palmer (R.～R.) The coming of the French Revolution, 1947, p. 15～16.